

イスラーム・ジェンダー学科研 2021 年度

イベント名：映画シンポジウム「女らしさ Mohtarama」

日 時：2022 年 3 月 4 日（金）17:00～19:50

会 場：Zoom を利用したオンライン開催

登壇者：Malek Shafi'i 監督、鳥山 純子（立命館大学国際関係学部）

モデレーター：後藤 絵美（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

* * * * *

後藤：本日は映画シンポジウム「女らしさ Mohtarama」にご参加くださいます、ありがとうございます。
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の後藤絵美と申します。司会進行および映画紹介を担当します。どうぞよろしくお願いいたします。

今回の映画シンポジウムの主催は、科研費基盤研究(A)空間・暴力・共振性から見た中東の路上抗議運動とネイション再考（代表：酒井啓子、21H04387）です。また、科研費基盤研究(A)イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究（代表：長沢栄治、20H00085）および立命館大学 中東・イスラーム研究センター（CMEIS）の後援によって開催が叶いました。監督をご紹介くださった山形国際ドキュメンタリー映画祭の皆様にもお礼を申し上げます。

ご存知のように、アフガニスタンでは 2021 年 8 月、ターリバーンが新政権の樹立に向けて動き出しました。8 月の時点で世界が固唾を呑んで見守る中、ニュースにあらわれたのが、路上に出て、よりよい未来を求めるべく声を上げる人びとの姿でした。今でもそうした動きは続いているのですが、私自身最初のニュースのなかで、その光景に驚いた記憶があります。なぜ驚いたのかと振り返ると、アフガニスタンの女性、あるいは男性が、路上で声を上げるという姿が想像できていなかったからです。中でもとくに印象に残ったのが、「アフガン女性は存在する」というスローガンを掲げた女性たちの姿でした。自分たちが「いる」ことをあえて強調したのは、かつてのターリバーン政権や、それを批判する国際メディアによって、女性たちがしばしば見えない、あるいはいない存在として表象されたことに関係しているように思われました。

日本でも、アフガン女性に対して、「顔を覆われた存在」「隠された存在」というイメージを抱くひとが多いのではと思います。今回ご覧いただく映画、Malek Shafi'i 監督と Diana Saqeb 監督の作品「Mohtarama」では、そうした印象が大きく裏切られます。というのも、ここ十数年のあいだに、女性たちが自らの思いや願い、考えを語ったり、路上に出て声を挙げたりする動きがあったということが記録されているからです。

私自身がこの映画を知ったのは、2013 年の山形国際ドキュメンタリー映画祭での上映を通じてでした。映画祭のウェブページに当時のカタログがありますのでご覧ください。（リンク：<https://www.yidff.jp/2013/cat041/13c043.html>）

このページには、Malek Shafi'i 監督と Diana Saqeb 監督の紹介も掲載されています。いずれもアフガニスタンのご出身で、亡命生活や海外での生活も経験しながら、2000 年代後半からカーブルで暮らしておられたそうです。現在は二人とも海外在住で、今日はこの会の後半に、コペンハーゲンにお住いの Malek Shafi'i 監督がご登壇くださる予定です。

上映に先立ちまして、映画の内容について簡単に触れておきたいと思います。まずはアフガニスタンの概要について。現在の人口は4000万人ほどと言われ、日本の3分の1程度ということになります。民族としてはパシュトゥーンが40%ほど、タジクが27%ほど、ハザラとウズベクが10%以下と言われます。人口の大半はイスラーム教徒で、うち8割から9割がスンナ派、1割、2割がシーア派だと推定されています。

スンナ派、シーア派という区別に言及したのは——この映画は3つの場面に分かれるのですが、そのうちの 하나가カーブルで行われた、シーア派の家族法に対するデモ行進に関わるものだったからです。

2009年2月にシーア派家族法案が国会を通過します。そのなかには、夫婦関係において圧倒的に女性に不利な条項が含まれていました。例えば、①女性は夫に従い、教育や就業を含め、外出するには夫の許可が必要である、②女性は夫が性交を求めた場合、拒否することができない、③女性の婚姻可能年齢を9歳にする、また、④親権は基本的に夫にあるとするなどです。(参考：https://www.cw4wafghan.ca/sites/default/files/attachments/pages/cw4wafghan-familylaw-factsheet2_0.pdf)

法案を作成したのはシーア派の高位聖職者モフセニー師で、映画の中にもテレビ画面を通じてその姿が映し出されています。2009年4月、カーブルで同法案に反対する女性たちの抗議運動が始まりました。参加者は約200名。それに対する反抗議行動がモフセニー師の支持者の男性を中心に行われ、800名から1000名が集まったと報じられています。

映画の残り2つの場面は、2010年のヘラートと、2011年のマザーレ・シャリーフで撮影されました。ヘラートではブルカ屋の女主人——この人は大卒で、明け透けに話をする大変楽しい人です——が、マザーレ・シャリーフでは12歳で結婚を余儀なくされた女性が登場します。マザーレ・シャリーフの女性は、自分自身の人生と10世紀の女性詩人ラービア・バルヒー(Rabia Balkhi)を重ねながら語ります。

これら3つの都市における出来事、出会いを通して、アフガニスタンで女性たちが置かれてきた状況と、その中で育ってきたフェミニズムが、この映画では描き出されています。

映画の上映後、シンポジウムの第二部では、立命館大学国際関係学部の鳥山純子さんと Malek Shafi'i 監督にご登壇いただきます。鳥山さんはジェンダー論、中東ジェンダー研究、文化人類学がご専門で、アラブ圏、主にエジプトをフィールドとしてご研究されています。今日は映画についてのコメントに加えて、マラク監督へのインタビューの先陣を切っていただきます。その後、フロアの皆さんと一緒に、質疑応答や議論へと入っていければと考えています。

前置きが長くなりました。それでは映画の上映に入ります。

* * * * *

第二部を始めます。このセッションでは、鳥山純子さんと Malek Shafi'i 監督にご登壇いただき、お話を伺っていきます。

鳥山さんは、エジプトのカイロに長らくお住まいでした。現地で調査を行うとともに家庭生活を営んでおられ、得難い体験をされています。今年3月末に当時の調査をまとめたご著書『私らしさの民族誌——現代エジプトの女性、格差、欲望』が刊行されます。

Malek Shafi'i 監督は、1999年にイランのテヘランの映画制作学校で勉強されて、その後アフガニスタンや海外でドキュメンタリー映画を数多く制作されてきました。2006年にアフガニスタン・シネマ・クラブ

(BASA) を設立し、現在も BASA の活動を続けています。これまでに 30 本以上の映画を制作され、そのうちのいくつかは、様々な国際映画賞を受賞しています。

マラク監督、今日はありがとうございます。今、日本語で監督のご紹介をさせていただきました。コペンハーゲン朝の 10 時を回ったところですね。おはようございます。

※以下、マラク監督とのインタビュー部分は鳥山氏による同時通訳。

Malek: 映画を上映してくださったこと、そして講演にお呼びくださったことに感謝します。

後藤: それではマイクを鳥山さんにお渡しします。まずは鳥山さんからのコメントをお願いし、その後続けてインタビューに入っていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

鳥山: ありがとうございます。立命館大学国際関係学部の鳥山純子と申します。私は映画の専門家ではありませんが、今日はどのように私が今回の映画を観たかについて、お話しさせていただきたいと思います。

最初に私が『Mohtarama』を観たのはちょうど 2 年前になるかと思うのですが、この映画を題材に、後藤絵美さんが映画に関わる、今回のような私たちのイベントを開催するという話があったときだったと思います。ただ当時の私は、映画を観てすぐにその良さに気づくことができず、むしろいくつかの違和感の方が気になっていました。

何に一番違和感を抱いたかという、すごくありがちな「西洋対イスラーム」のようなもの、あるいは、女性の覆いというものを中心にしてイスラーム教を信仰する女性たちの運動を語るとい、その構図がすごくステレオタイプ化されたものではないかという気がしてしまったのです。当時、嶺崎寛子さんと一緒に翻訳した『ムスリム女性に救援は必要か』(ライラ・アブー＝ルゴド著、書肆心水 2018 年) という書籍を出したばかりだったこともあり、映画の中の表象が、西洋の枠組みにおけるイスラームの位置づけに絡め取られてしまっているのではないかと思ったわけです。そこでは、「抑圧されているアフガニスタンの女性」という表象が繰り返されていますし、しかも、それをアフガニスタンの男性が行っている、つまり、その構図が西洋のものであるだけでなく、実際にアフガニスタンの女性たちもそうした状況を生きているのだということが描かれている、とすることで終始してしまうように思いました。それがまた、映画という、情報量の多いものを通して提供されることで、観る者にも刷り込まれてしまうのではないかという危惧を覚えたのです。

もしかすると今日映画を観た方々のなかにも、そうした感想を抱いた方がいるかもしれませんが、言ってみれば、この映画に登場する女性たちの語りをそのままに受け取れば、今述べたような違和感を抱くのは、むしろ当然のことだったのではないかと思います。

ところが、今回またこのイベントに参加するにあたり、さらに何度かこの映画を観る機会をいただいて、私のなかで映画の印象が大きく変わっていきました。映画は被写体の世界観や、監督の世界観が前面に出て、観る者にそれがダイレクトに伝わるのですが、それでもやはり、私が生きている文脈と、この映画の文脈は少し違うわけですね。おそらく、それを今日本で生きている「私」が理解するうえでは、大なり小なり読み換えが必要なのではないかと思ったわけです。

一番気になったのは、「Mohtarama」、「女性らしさ」という題名に込められた意味です。言ってみれば、

その「女性らしさ」がいいことであるかのように女性に押しつけられ、実際にはそれが毒であったとしても、砂糖として飲み下さなければいけないという、そうした状況を描いていたのが、この映画でした。つまり、これはアフガニスタンにおける女性嫌悪を表象しているものである、と。女性嫌悪と言ってしまうと「ありがち」なのですが、結局服装の話なのか、スカーフの話なのか、ブルカの話なのかというとそうではなくて、覆っていても覆ってなくてもだめ、あるいは家庭での女性役割が求められるけれども、それをこなしているから、では外で活躍してもいいのかといったらそれもだめ。さらに言えば、移動しても移動してなくても、とにかく女性であるということそのものが女性の活動を制限する社会が描かれていた、ということに思い至ったわけです。

確かに、最初の印象では、女性たちの権利が抑圧されていると声を挙げる女性たちの認識が、ある意味、西洋から借りてきたものだけに形取られているように思われました。しかしむしろ、そのように女性であることを前面に押し出して、その待遇の改善を訴えなければいけないのは、女性たちの認識の問題ではなく社会の認識の問題、アフガニスタン社会がそういうことを女性たちに強いるからであり、女性たちはそこに対して声を挙げなければいけないからだだったのだということに、ようやく気が付いたのです。

ここで映し出されている女性たちは、女として声を挙げているのではなく、むしろ「女として」しか生きられない社会に異を唱えているのではないのか。女が欲望の対象としてしか見られないことに対して自分たちは立ち上がっているというのですが、おそらくそれは、女が「欲望の対象にしかになっていない」ことが問題なのではなく、女が欲望の対象なのに、その「女であること」しか社会に認められないという、このことに対して声を挙げているのではないかと今回新たに思ったわけです。

言い換えてみれば、アフガニスタン社会は何よりもまず女が「女である」ことを押しつけられている社会であって、それ以外のものになれない社会である。女性たちは男女の平等を求めていると言っていますが、むしろ、日本に暮らす私にじっくりくる言い方に言い換えてみるならば、彼女たちが生きている社会的規制が「女性」であることを理由に行われている、まさにそのことを社会に認めてもらうことが求められていたのです。これは私が何かをしたからその罰として強いられる苦境ではなくて、私が「女」とみなされるからこそ強いられる苦境なのだと。そういうことを社会は「私たち」に求めているのだという、その不公正を的確に指摘をすることが、ここで映し出されている女性たちのデモンストレーションであったり、運動であったり、あるいは社会を批判的に眼差すということで、最も明確に表象されているものなのではないかと思いました。ただし、これは彼女たちが話していることを字義通りに受け取っての感想ではないので、マラク監督がいらっしゃっているこの機会に、「私はこのように読みました」とみなさんに共有させていただくうえで、いくつか監督に質問をしたいと思います。

マラク監督、最初にこの映画を撮った意図についてお話をいただけますか。

Malek: 私がこの映画を撮ろうと思ったのは、「記録する」ためでした。例えば、この映画と一緒に撮ったディアナ監督は女性運動に積極的に参加していました。[彼女や周囲の人々を見ていく中で] アフガニスタンの女性たちが今、社会に前向きな変化をもたらしていると感じました。それで、まずそのことを記録すべきだと思ったのです。

また、女性活動家のネットワークを作りたいという思いもありました。当時アフガニスタンでは、女性運動が各地で起こっていましたが、それぞればらばらで、接合されていませんでした。例えば、カーブルで大きな運動が起こっているということを[アフガニスタン内の他の地域の活動家に]知らせ、運動として繋い

でいく必要があると思ったのです。

今ではこうした試みを実践して本当によかったと思っています。この映画は結果的に、歴史的な瞬間を記録したものであるとともに、歴史そのものになってしまいました。[撮影を始めてから] 15 年ほど経ちますが、この間アフガニスタンの女性たちは、社会を変えるために継続して活動を行ってきました。

もちろん、その間状況は常に厳しかったわけですが、近年になり難しさは増しています。今のアフガニスタンでは、このように女性たちが活発に活動をするということとはできなくなっています。

鳥山：こういった女性運動に、監督は男性としてどのように向き合ったのでしょうか。

Malek: 私はアフガニスタンのハザラ人として、マイノリティとして生きてきました。ソビエトの侵攻を避けるために 12 歳でパキスタンに移住したのですが、その時、5 人の姉妹は共に移住をすることが叶いませんでした。[彼女たちを置いて] 移住した私は、いつもアフガニスタンのことを思い出すわけですが、そのときに常に頭にあったのが姉妹たちのことでした。後に、私がアフガニスタンに戻ったときにも、やはり彼女たちのためになることをしたいと願ったのです。

ハザラ人という[民族的]マイノリティであることが、ある意味、女性たちが置かれた状況に近いとも思いました。そのようなこともあって、社会にとっては安定が最も重要なものだ、そして、その安定のなかにある平等が、社会には欠かせないと強く信じるようになりました。

鳥山：アフガニスタンの男性であることは、アフガニスタンの女性運動を撮る監督になるということと矛盾しないのですね。

Malek: 矛盾しません。

鳥山：女性運動に対するマラク監督の考え方は、アフガニスタン社会において一般的なののでしょうか。

Malek: 残念ながら一般的なものではないと思います。もしこれが皆の考え方であったなら、今アフガニスタンの女性をめぐる状況は全く違っていたと思います。アフガン男性のなかには、男性が女性を管理しなければならない、そうする権限があると考える人が多いというのも事実です。その背後には、戦争と政治的なイスラームのイデオロギーの浸透があります。ソビエトの侵攻以前、とくに大都市においては、女性でも仕事をしたり、学校に行ったりすることは当たり前でした。当時の社会はより安定していましたし、言ってみれば「普通の」社会であったのです。しかし戦争を経験するなかで、アフガニスタンの男性たちの間で、女性たちを社会のなかの特定の場所に隔離していこうとする動きが起こりました。

鳥山：「イスラームのイデオロギー」というのはどのような意味でしょうか。

Malek: ここでいう「政治的なイスラームのイデオロギー」を説明するには、40 年前に遡りますが、イラン・イスラーム革命、そしてパキスタンの分離独立に話を戻す必要があります。イラン、パキスタンという二つの国は、政府がイスラーム的であるべき、あるいはイスラームに基づいて国家が運営されるべきとい

う思想を打ち出しました。アフガニスタンは、イランにもパキスタンにも国境を接していることがあり、それらから強い影響を受けてきたわけです。

とくに、アフガニスタンに対するソビエト侵攻以降は、イランとパキスタンからのイスラーム思想の流入の動きが急激に強まりました。例えば私自身、パキスタンとイランに移住をした経験がありますが、それはなぜかと言うと、学校教育を受けるためでした。戦争のためにアフガニスタンの学校が閉鎖されてしまったからです。教育を受けるため私はパキスタンに行き、マドラサ（イスラーム系の学校）に通うことになりました。行かないという選択肢ももちろんありましたが、その場合は代わりに、アフガニスタン国内で児童労働に従事するという道が待っていたのです。学校教育を受けるためには、そうした国に行くしかありませんでした。

パキスタンやイランに移住して、その後アフガニスタンに戻ってきた人たちは、二つのものをアフガニスタンに持ち帰りました。一つが銃であり、もう一つが政治的な、イスラームのイデオロギーでした。このイデオロギーのなかには、武力行使的による闘争にまつわる思想も含まれていましたし、女性を支配下におく考え方も、このときに一緒にアフガニスタンに持ち込まれました。戻ってきたムジャヒディーン（努力する者たち、あるいは戦闘者たち）が持ち込んだ思想が、今でもアフガニスタンで中心的な役割を果たしています。

鳥山：監督は「銃やイデオロギーを持ち帰った人々」と同じ場所で勉強したわけですが、その後、彼らと同じことをせず、結果的にこうした映画を撮ることになったのはなぜでしょうか。彼らと監督とは何が違ったのでしょうか。

Malek：私が、多くのムジャヒディーンと同じ思想を持つに至らなかった理由の一つは、おそらく、幼少時から芸術に強く興味を抱いていたからだと思います。とくにイランにいたときには、書道に強い関心を持ちました。それが学校で触れることのできる芸術の一様式だったからです。私は音楽にも興味を持っていましたが、音楽を学べるほど裕福ではありませんでした。書道を通じて芸術の世界に触れたことが、結果として、政治的イスラーム思想の保持者らと一線を画す契機になったのではないかと思います。

鳥山：ではもう一度、『Mohtarama』の中の話に戻りたいと思います。現在のアフガニスタン社会において、女性の役割や女性運動の重要性について、どのようにお考えでしょうか。

Malek：アフガニスタンだけでなく、どこの国でも、女性運動は重要な役割を果たしていると思っています。ただ残念ながら、現在のアフガニスタンの状況においては、ターリバーン政権のもとで、それを行うことは非常にリスクが大きい。そういうなかで難しくなっているということも指摘せざるをえません。

鳥山：最後に、日本との比較で私が感じたことについて監督に聞いてみたいと思います。この映画のなかでアフガニスタンの女性たちは、少なくとも自分自身が置かれている境遇や困難が「女性である」ことに由来するものだということに気づいています。それに対して、日本ではどうなのだろうかという問い、あるいは危機感を私は持っています。日本の状況について、監督からもコメントいただけませんか。

Malek: 日本について語るための知識が私にはないのですが——東京で一週間ほど過ごしたことがあるくらいです——日本も保守的な、あるいは伝統的な社会なのだろうと感じています。ただ、アフガニスタンと大きく違うのは、日本には安定があるということです。女性にも許されている領域が多いということが、大きく違うのではないのでしょうか。アフガニスタンの女性は、社会運動をしなければならない、そうしなければどうにもならないような状況に追い詰められてしまっている、そういった背景があります。もしかすると日本の女性たちが同じような活動をするようになるには、何かきっかけが必要なのかもしれません。

鳥山: マラク監督、ありがとうございました。それでは後藤さんにマイクを戻します。

司会 (後藤): マラク監督、鳥山さん、素晴らしいインタビューをありがとうございました。本当にたくさんのかたの事を学ばせていただきました。ここからは Q&A に入りたいと思います。

今回のイベントは抗議運動に関するプロジェクトの主催ですので、まずは私の方から伺ってみたいことがあります。映画では 2009 年にカーブルで起こった女性たちのデモンストレーションが取り上げられていました。女性による最初の大きな運動であったということですが、それは本当に最初のものだったのか、そして、なぜこの時期に女性たちが声を挙げ始めたのかという点について教えていただけますでしょうか。

Malek: 2009 年以前にも小さな抗議行動、デモンストレーションはあったと思いますが、2009 年の運動は非常に重要で、そして大きなものでした。特定の人たちが中心になって通そうとした法案があり、それに対して反対する必要があったからです。その法案のなかには、女性の単独での移動を完全に禁止するという事も含まれており、それに対して女性たちが立ち上がりました。デモは、カーブルの大きなマドラサの前で行われました。

実はあのデモのスタート地点は、私が当時働いていたオフィスだったのです。その時の同僚、ディアナ監督とほかの 2 名の同僚も含めて、この抗議行動の中心人物となっており、私たちのオフィスで、スローガンや小道具を用意していて、私自身も旗などを持ち出すことに一役買ったのです。

司会: いくつか質問をいただきました。まず一つ目が、モノクロ作品にした理由を教えてください、というものです。

Malek: いわば、芸術的な観点からとった手法ということになりますが、撮影をした当時の女性の状況は決して喜ばしいものではありませんでしたし、カラフルなものとして撮るような明るい状況ではなかったからというのも理由です。

司会: ありがとうございます。続けて、劇中に少女たちが剣舞をする英語の劇があったのですが、あれはどういったものなのでしょうかとご質問です。

Malek: あの場面で撮影されたのは、ある演劇の舞台です。そこで扱われていたのは、アフガニスタンの歴史のなかで、女性リーダーが率いた女性の部隊がアフガニスタンのために闘うという物語です。山に籠っ

て闘うのですが、最終的にその部隊の隊員は皆殺されてしまいます。あのシーンは、現在の女性の状況とアフガニスタンの歴史とを関連づけるものとして、入れました。

司会：ありがとうございます。次にいただいた質問に移ります。ラービア・バルヒーという女性詩人が登場しましたが、彼女はこういった人物なのでしょうか。

Malek: ラービア・バルヒーは文学者でありながら活動家でもあり、そして初の女性詩人であるとも言われています。アフガニスタンでは非常によく知られた存在です。現代のアフガニスタンの女性運動においても、ラービア・バルヒーは英雄のごとく扱われています。彼女自身、政治的希求のもとに命を落としたことで知られており、その意味で運動の象徴的人物となっています。

司会：ありがとうございます。続けて、次の質問です。この映画を観て、シリア北部のロジャヴァ革命に参加した女性たちの武装蜂起の気持ちがわかるような気がしました。アフガニスタンの女性たちのあいだでは、ロジャヴァでのクルド人たちの武装ジェンダー革命をどのように見ていたのでしょうか。

Malek: アフガニスタンの女性たちは、シリアやイラクのクルド人女性たちの闘いから大きく影響を受けていると思います。女性でありながら闘いをするを選んだ、捕虜になるという経験をしているわけです。実際に、自分たちが女性でありながら武装蜂起をする、とくにターリバーンに対してそういった闘いに出ることをどう思うかと、私にアドバイスを求めた人たちもありました。こういった女性たちが言うには、自分たちには20人から30人くらいの、同じような気持ちを抱く同志がいるということでした。

彼女たちは、このままアフガニスタンにいても自分たちには未来がない、家のなかに閉じ込められていて、この先何もないと言います。そのような気持ちのなかから、彼女たちは、武装したいという願いを口にしたのだと思います。ただ、実際に彼女たちが武装して戦闘に加わったというようなことはないと思います。そういう方法すら、彼女たちには与えられていないのです。

司会：ありがとうございます。続けて、「デモをしている女性たちに嫌がらせをしていた男性たちのところに来て、『君たちではないが、デモをしている人達に嫌がらせをしている男たちがいる。ここに固まらないで他所に行ってくれ』と注意をしに来た男性がいましたが、あの人は警官でしょうか。警官はデモ参加者を守るのを仕事として心得ていて、その役割を果たしているのでしょうか」ということです。

Malek: そうですね、彼らはデモンストレーションを守るという仕事を与えられた警官です。少なくとも当時の状況においては、まだ国際社会の目もありましたし、許可の上でデモンストレーションをさせようという意識が警察にもあったと思います。

司会：次の質問です。チャドルやブルカといった色々な用語が出てきましたが、どのような装いが批判されるのでしょうか。どこを覆うことや覆わないことが求められているのかという質問です。

Malek: チャドル、チャドリー、ブルカはそれぞれ女性の身体を覆うもので、どれだけ覆われているのかで

呼び名が変わります。チャドルが最もオープンなものだとすれば、チャドリーは顔だけが出ている状態、ブルカは被りものです。つまり覆われて顔も見ることができない、何も見ることができないような状態になっているものだと考えています。ムスリムが大多数を占める国のなかでも、チャドルでいい、しかもそんなに隠さなくてもいいという国もありますが、アフガニスタンのように厳格なイスラーム的イデオロギーが実践されている場所では——私自身はイスラームというのは顔と手を出しておくことは問題ないと思いますが——それ以上を覆うようにと要請してくるところもあるわけです。

司会：ありがとうございました。では、最後の質問です。「抗議活動を行う女性を揶揄する男性たちが、『彼女たちは西側の思想に踊らされているだけだ』というロジックを共通して使っていると受け取りました。この言説はアフガニスタン社会で一般的ですか。可能であれば、いつ頃から、どのような文脈で使われてきたか、教えていただきたいです。」

Malek: これがどのくらい一般的に見られるかというのは、アフガニスタンのどのような人々について語るかによっても違うと思います。とくにエスニシティ、パシュトゥーン人のなかではこういった言説は広く浸透していると思います。パシュトゥーン人のコミュニティのなかでは、彼らが考える「普通」ではないもの、「普通」から外れたものを、西洋的な価値観に基づくものだとする考え方があるようです。ただ、ハザラやタジクといった都市部の人たちにおいては、こういった言説はあまり聞かれません。もちろん、例えばタジク人であっても、特定の宗教グループに属している場合には、こうした言説を用いる人もいます。

映画に登場する、デモに反対する男性たちというのは実は、一般的な人たちではないのです。彼らは基本的にイスラーム学校に通っている人たちであったり、あるいは、イスラーム的なイデオロギーを信奉したり、支援したりしている人たちです。

司会：ありがとうございます。実はこの機会にみなさんにご紹介したい方がいます。舟越美夏さんというジャーナリストで、今年1月に3週間ほどアフガニスタンに入って取材をされて、女性運動の参加者にもインタビューをしておられます。舟越さん、コメントや質問等いただければと思います。

舟越美夏さんの記事：

「タリバン暫定政権のアフガニスタンを歩く①」

<https://news.yahoo.co.jp/byline/funakoshimika/20220215-00282114>

「私たちには夢があった」タリバン政権下で声を上げるアフガニスタンの女性たち

<https://dot.asahi.com/dot/2022031600099.html>

舟越氏：ありがとうございます。マラク監督、大変素晴らしい映画をありがとうございました。モノクロで表された雪を見て、アフガニスタンに行ったときの光景を思い出しました。絶望と諦めと怒りと少しの希望があるという光景です。大半の人がお腹を空かせていました。そのなかで私は、10代から20代の、社会に向けて声を挙げていた女性たちの話を聴きたいと願い、なるべく多くの人に会おうとしていました。

きっかけは、6年ほど前に、詩を書いている女性たちの話を聞いたことです。それも10代から20代の女性たちでした。彼女たちの言葉の素晴らしさ、豊かさ、その内面の表現に、訴えかける力を感しました。

そこに——私は日本の九州で育ったのですが——非常に保守的な社会のなかでもがいていた自分の中にあったものと重なるものを見出しました。アフガンの女性たちはもっと厳しい状況に直面していたわけですが、そのなかで次世代のことを考えて行動しており、「密かな闘志」を持っていました。

その子たちのことが忘れられなくて、今回、少し下の世代になるわけですがそれでも、同じく 10 代と 20 代の、旧ターリバーン政権が崩壊した前後に生まれた女性たちで、しかも「通りに出た」女性たちの話を聞きました。彼女たちはより直接的な絶望と怒りを持っていたように感じました。さらに大胆な行動、「今、自分たちがこれをやらないとどうにもならない」という純粋な気持ち、しかも彼女たちは、自分たちの命が危険に晒されているということも自覚していました。

監督に質問です。以前、政府系機関に勤めるある女性に「この状況は今後どうなるのでしょうか」と聞いたところ、彼女は「女性に教育を与えることはできたのですが、必要なのは男性の教育だったのです」と答えました。戦乱を長く経験した国では、男性の教育もまた難しいことだったということでした。今後、男性を教育し、それによって社会を変えていくということは可能なのでしょうか。

Malek: 男性の考え方を大きく変えるのはかなり難しいことだと思います。教育という意味では、学校教育へのアクセス自体は、過去 20 年間、男性にも女性にも保証されてきました。問題になったのは、教育にアクセスがあるかだけではなく、どんなカリキュラムで人々が学んでいくのかというところでした。たとえば、カーブルの大学で、社会学の授業を履修したとしても、その社会学が非常にイデオロギー色の強いものであるという状況があったのです。

結局のところ、今の男性の考え方を变えるうえで最も大きな障害は——あるいはそれを難しくしていることは、この 40 年に亘る戦争の経験だろうと思います。この経験を乗り越えるためには、システムが適切に作り上げられなければなりません。私たち人間は、システムに従って生きる、そういう属性を持っていますから。

男性の考え方が変わるという希望、あるいは変化の契機があるとすれば、それはおそらく、宗教的な空間だけでなく、非宗教的な空間があるという条件が前提になります。アフガニスタンは非常に多様な人々が集う国家ですし、そのなかで、多様な宗教的信条あるいは価値観を持つ人々が共にいます。そうしたところでシステムを作るとするならば、非宗教的な形でなければ難しいように思われます。ただし現在のところ、そういったシステムが生まれる兆しは、これまで以上に見えなくなっているように感じています。

司会: 最後の質問になります。多くのアフガンの方々が国外に出ていますが、これまで女性運動を率いてきた人々をつなぐネットワークはあるのでしょうか。最後に登場した女性が、「知ってつながることが重要だ」とおっしゃっていました。それを叶えられたらと思いますが、日本で暮らす私たちもそのネットワークに入ることは可能でしょうか。

Malek: ネットワークは非常に重要になってくると思います。映画で取り上げた女性たちのなかにも外国に移住したり、亡命を余儀なくされた人たちがいます。みな、必ずしも健康状態や置かれている状況が良いわけではないので、ネットワークが非常に重要になってくるわけです。現在ですと、ソーシャル・ネットワークを使ったコネクションが有効だと思っています。長期的に考えると、変化を起こすためには安定したネットワーク作りが重要になります。私自身、一緒に育った幼馴染が現在 25 か国に散らばっているという状

況があり、そういうなかで「繋がっている」ということは非常に重要に思います。私は現在、ソフトウェア開発者として働いている身ですから、そういったところを生かして、繋がりをもつためのアプリケーションを作っていくということも考えていかなければならないと思っています。

ネットワークがなければ、この先アフガニスタンの将来をどのようにしていくのか、あるいは、アフガニスタンに残してきた家族をどうするか、その人たちとどうやって繋がっていくべきかといった問題が解決されないままです。誰もが、希望が見い出せないという状況がありますから。

本当にアフガニスタンで変化を起こしたいのならば、おそらくアフガニスタン国内に残るとというのが一つの重要な方法だと思います。しかしそれが叶わない以上、違つかたちで何かやっていかなければいけない。一つのやり方としてはおそらく、NGOなどと連携しながらアフガニスタン国内の人々とうまく繋がっていくことが必要になります。

また、たとえば映画という点においても、かつては、たとえば「人権映画祭」のようなかたちで、アフガニスタンで映画祭が行われたこともありましたが、現在では国内で映画を作ることは非常に難しくなっています。あるいは、アーティストとしてアフガニスタンで生きていくことも難しく、どんどん国外流出が起こっています。そういう状況のなかで、日本にいらっしゃるみなさんが、このアフガニスタンのネットワークと繋がろうと思うのならば、ぜひこの映画に登場してくるような方々の Twitter をチェックしてみたいです。多くの Twitter のディスカッションは、彼女たちの言語で行われていることも多いのですが、時には、英語のディスカッションもあります。それに参加するというかたちで関わるのが可能だと思います。

司会：ありがとうございました。マラク監督、最後に一言ありましたらぜひ。

Malek: 今日は久しぶりに自分の撮った映画を観て、少し感傷的になってしまいました。また、先ほど言いましたが、女性たちの Twitter に興味がある方はそれぞれフォローしてみてください。私自身は、他にも少なくとも三作品、アフガニスタンの女性に関わる映画をつくりましたので、またこのような機会が持てたら嬉しいです。

司会：ありがとうございます。それではお時間になりましたので、ここで閉会とします。本日はご参加をありがとうございました。次はオンラインだけでなく、オンサイトでもお目にかかれることを願っております。マラク監督、鳥山さん、今日は本当にありがとうございました。大変素晴らしい時間を過ごすことができました。私たちはこれからも、アフガニスタンのみなさんとともにありたい、そう願っています。

(了)